少女小説

大火の後

永代美知代

丁度午前一時半、眞夜中に近い寢入花の時刻ではありましたけれど、宵から吹き荒んだ風が、寮の鎧窓に當つて、物凄い音を立てました。こんな晩に火事でもあつたら如何なる事かと思ひ出すと、それからそれへと恐い怖ろしい事ばかりが考へられて、慶子は同室の誰彼殘らず。おだやかな寐息を立てゝ眠つた中に、唯一人まぢし〳〵ながら、遠くから傳はつて來る十二時の汽笛らしいのも聞いたのでしたが、何時の間にかうとうと眠つて、そして今、けたゝましい警鐘に驚かされました。

『デヤン〳〵、デヤン〳〵』

警鐘は愈々烈しく鳴り響きます。

『火事だ！』

飛び起きた慶子は震ふ手先で、鎧窓を押し開けました。と直ぐもう眼の前一帶が、パアッと燃え立つて、空まで紅く染つて見えました。

『近火！』

と思ふと慶子はハッとして、それと一緒に何とも云

亂打される警鐘

『デヤン〳〵〳〵』とまるで狂氣のやうに亂打される警鐘は、ビュービューッと烈しく唸つて吹きまくる魔風の隙間を忍んで、一生懸命破れるやうな響を、家々町々へ傳へやうと鳴り渡ります。

『オヤー』と枕をもたげて、慶子は聞耳を立てました。

へぬ引きしまつた氣持になりました。もう先刻のやうに手先も震へません。動悸の甚い割合に、自分ながら變なほど落着いて居るのでした。電燈を捻つて、一寸寢亂れた姿を直すと、慶子は皆を呼び覺しにかゝりました。

『皆樣々々火事です、火事です！』

『え？どうなすつたのよ慶子さん』

寢ぼけた眼をこすりながら起き上ると、誰も彼も、思はず聲を立てました。

『アラ！火事だ！』

口々に聲を限りと呼び立てゝ、慶子と一緒に室々の扉を叩いて廻りました。寮舍は急にごつた返した騷ぎになつて、無暗に周章た生徒達は、如何する術も知らずに、たゞうろ〳〵廊下を走り廻つて居るのです。

其處へ西川舍監は飛ぶやうに驅けて來て、嚴かな調子で一同を見渡しました。

『皆樣、どうぞ周章てないで、私の云ふ事をよく聞いて下さい』

寮生の靜まるのを待つて、舍監は續けました。

『皆樣、火事は非常に近くです、そしておまけに、この甚い今晩の風に、學校は丁度風下に當つて居るのです。ですから私共は身を持つて逃れる外ありません、幾ら荷物を持ち出した處で、猛りに猛つた火は、何處までゝも廣がつて果しが無いやうです。生中荷物を持ち出すために怪我をしてはなりません。皆樣どうぞ着物や荷物に惜しみをかけないで、命丈けを助かつて下さい。そして皆樣の一番の晴衣と着更へて、出來る丈け早く、五分後に校堂で鳴らす鐘を合圖に、一人殘らず此處へ集つて下さい。私共は見苦しくないやうに、取り亂した身裝をつくらつてから、一時も早く安全な場所に立退かねばなりません』

氣がついて見ると、西川舍監は何時のまにか、黑縮緬の五つ紋の被布に着更へて、鼠色の袴を穿いて、一絲亂さず頭髮までキチンと梳き上げて居るのでした。

走つて室に歸ると、寮生はてんでに行李を開けました。何一つ口を利き合ふ事もせず、一生懸命手早く着

更へにかゝつた慶子は、誰よりも先に身仕度を了へました。

行李の底を探つて奉書の紙包みを取り出した慶子は、それを紫メリンスの風呂敷にくるんで、袴の下から、確りと腰に結ひつけました。そして本棚の上の壁に吊るされたつまみ細工の寫眞懸を下さうとして、ふみ臺代りに机の上に載つた慶子の手が、丁度寫眞懸の紐に屆くと一緒に、突然机が引くりかへつて、慶子は横倒しに倒されました。

『アラ御免なさいな』

重たげに押入から行李を持ち出した貴美子は、よちよちよろける拍子に、慶子の机に突き當つたのです。投げ出された行李は打ち開けられて、四邊一杯に美しい着物が散らばりました。

『否、如何致しまして——』

云ひながら身を起した慶子は、壁を見上げると、色を變ました。

『アラ！』

急き込んだ調子で、慶子は室中を見廻しました。重い本棚をわざわざずらせて、物蔭まで隈なく探して見ましたが、壁から落ちた寫眞懸は何處にも見當りません。

『何をそんなに探してらつしやるの？』

斯う忙しい着更への手を休めて皆から訊かれる程、慶子はうろうろ落着きの無い容子を見せました。

『だつて私、大事なものが發見らないんですもの――何處へ落ちたんでせう？』

『大事なものつて何？』

室長は親切に訊いて呉れるのでしたが、もう校堂の鐘が鳴り出しました。

『そらベルよ！』

皆はドタバタ廊下を驅け出しました。

『慶子さん早く！』

云ひ捨てゝ室長は帶〆めの紐を結びながら、皆の後に續いて行きました。

廊下の方では西川舍監の點呼の聲が聞えます、それを聞くと慶子は氣が氣ではありません。ですけれども其儘寫眞を探さないで行く氣には如何してもなれません、慶子は早くに兩親に死別れて今では形見の寫眞に戀しい懷しい父母を偲ぶ外はない、憐れに悲しい身の上なのです。

『あゝあ私如何しませう！』

力なく首垂た儘、兩手に顏を覆ふてすゝりないた慶子は、又思ひ返したやうに立ち上りました。

若しやと思つて慶子は、貴美子の散らかした著物を、一つ一つ取りのけて見るのでした。紫紺地に淡紅で散らした紅梅模樣の袷、緋紋縮緬の長襦袢、唐織の帶、空色縮緬の被布――とり〳〵に美しい色を誇つたが、慶子の尋ねる、可愛いつまみ細工の寫眞懸は、影も形も見る事が出來ませんでした。

『慶子さん、山口慶子さん！』

耳元で呼び立てられて。慶子は胸をつかれたやうに見上げると、扉を開けて西川舍監が目の前に立つて居りました。

『身仕度が出來たら、荷物をいちらないで來て頂戴、慶子さん、火の手はもう御堂まで廻つてるんですよ、あなたには先生の先刻の言葉が解らなかつたのですか』

慶子の態度を、未練がましく見て取つた舍監の言葉は荒かつたのです。

『先生！』

眞紅になつた慶子は、斯うした場合になつてまで、

着物なんぞに執着するさもしい少女と見られたのが恥しい、心苦しい。

『先生、私は寫眞を、二枚の寫眞を探して居るんです』

『寫眞を？』

『父のと母のと……』

慶子の眼からはら〳〵と、水晶のやうな涙が、こぼれて散りました。

『さうでしたねえ慶子さん、あなたの御兩親はおありなさらなかつたのね』

險しかつた舍監の瞳は急に同情の、やさしい色に輝きました。だがそれも暫し、間近に聞える鬨の聲に舍監は急き立て

『慶子さん、何事もお諦めなさい、愚圖々々して居て、時間をとると、皆樣へも御迷惑をかけるんです、ね、早く？』

『え！』

僅に答へた慶子は、西川舍監の手にすがつて、ともすれば顧みられる室を出て行きました。

『校長、これで殘らず揃ひました』

舍監の復命に首肯た校長は、先に立つて歩き出しました。

ぐわら〳〵ぐわらッと、恐ろしい地響を立てゝ崩れ落ちる石造の丸柱、イタリア風に造りなされたクラシックな庭園、それを後に眞珠の珠數をまさぐりながら行く尼僧の神々しさ、眞晝よりも明るく照し出された黑い服、純白のベール、そして頸に吊るされた銀の十字架が、燃え上る焰にきらり〳〵と輝くのです。

『どうだ、綺麗ぢやないか』

火事場に集つた彌次馬共は斯う呟き合つた。そして聖母マリアにも似た尼僧の後につゞく晴着姿の少女達を、繪のやうに美しく思つて見るのでありました。

火事場のあと

眠られぬまゝに誰よりも早く起きて出たます子は、朝の食事の出來る間を書齋に一人、胴桐の火桶を抱いて新聞を展げました。

『昨夜の火事は何處だらう？』

曉方に火事があつて、而もそれが、神田か麹町らしく思はれる方角に當つて、可成りの大火事らしかつた。

ます子はまさかとは思ひながらも、學校を氣遣つて、火事の場所を確めやうとするのです。

欄外に眼をやつたます子は、胸を躍らせました。

今曉一時半神田三崎町三丁目救世軍大學館三階より出火せり夜來の烈風は附近熟睡中の市民が身を以て避難する間も無く忽ち地を匍ふが如くに廣がりて四邊を火の海と化し東南に向つて延燒しつゝあり市中の各消防警官等は勿論軍隊よりも出動して極力消防に從事しつゝあるも風威に乘じたる猛火は何時鎮火すべくも見えず只今迄に已に二百戸を燒き盡せり。

（午前二時記）と讀んで居ると、新聞を持つ手がわなわな震へて來ました。

『あの、お嬢樣大變でございます』

襖の外から、あわたゞしい聲を立てながら、小間使のそのやが入つて來ました。

『お嬢樣の學校が燒けましたさうで御座います』

『アラ！本當？』

『本當で御座いますとも、甚い大火事ださうでしてね、學校も何も、ずつと彼方のお濠端迄燒けましたつて、錦輝館も東京堂も全燒ださうで御座います』

『誰から聞いて？』

『八百屋も酒屋も參る程の御用聞は皆さう申して參ります』

ます子は信じ度くないと思ひました。だがそれと聞いた父樣は、火事場の後は危いから學校を休むやうにと云ふのです、ます子は如何して家にじつと落着いて居られませう。

『だつて、だつて、身を以て辛つと逃れた位だと新聞にもありますわ、慶子さんが如何してゐらつしやるか氣になるんですものう』

ます子がお鼻を鳴らすものだから、父樣も強て行くなとは云ひません。

『さうかしら、まさか慶子さんは燒け死んでは居まい

學校が燒けましたので御見舞に行きます

がね、兎に角怪我をしないやうに注意してね』

『嫌な父樣！』

長い袂を振つて、輕く父樣を打つ眞似をしながら書齋を起つたまゝ、ます子は直ぐケープを羽織つて家を出ました。

曙町の停留場まで、屋敷町の細い小路に立つた霜柱を、華奢な靴先きでざくり〳〵、踏みながらも、ます子は疲れて蒼白めた慶子の顏を想像して見るのでした。電車は水道町までしか行きません、仕方無しに其處まで乘つて下車ると、號外屋が八釜しく鈴を振り鳴らして呼び歩いて居りました。それを買つて見ますと、三崎町から猿樂町へ掛けて一面黑く塗られた中に自分の學校がありましたので、ます子は今更のやうにハッとしました。

大變な人出で、父樣の言葉の通り、道は中々の混雜でした。辛との事で三崎町へ來て見ると、大通りの兩側には太い針金の柵が結はれて大勢の警官が見張つて居た。その一方の人道が開いて、其處から澤山な人々が出入つて居る。ます子が其處を入つて行きかゝると、突然に斯う聲を掛けられました。

『モシモシ、あなたの學校は燒けましたから、わざわざ出掛けても駄目ですよ』

振り返つて見るとそれは顏馴染の巡査でした。まだ一度も口を利き合つた事はありませんけども、毎朝定つたやうに學校の傍の交番の前に立つて居て、それでます子と見知り越しの仲なのでした。

『あの私、學校が燒けましたから見舞に行く處なのですの』

『併し危ないですよ、今やつと非常線を解いたばかりですから』

『でも行けるには行けるんでせう？』

『勿論行けるには行けますがね――』

『ぢや私、あの一寸行つて參ります』

ます子はずん〳〵進んで行きました。成る程、燒跡と云つても、四邊一面燒け渡つた家々の屋敷跡から、プスプス烟が立ち昇つて、如何にも物凄い慘憺たる光景である。歩く度に灰が立ち舞ふて、いぶい烟と一緒に眼口を襲ふた。暫らく行くうちにます子は幾度となく涙ぐんで來る眼を拭いたが、拭いても〳〵後から後から涙が湧いて、鼻の奥がヒリ〳〵するやうにも感じるのでした。

此處にも其處にも大勢の人だかりがして居て、燒けた物品を片附ける人夫の傍に立つたきり、馬鹿かと思ふやうな呆然した容子の主人らしい男もあつた。

『あら！校門が！』

斯う口に出してます子は、戰爭の後かと思はれさうな燒け殘りの煉瓦塀をさして驅け出した。黑く煤けた凄じい有樣になつた塀の眞中に、板の開き門が無事に殘つて、門がかけられて居る。ます子が入る事も出來ないで間誤ついて居ると、何處から見つけたのか、門番の爺やが出て來て開けて呉れました。

『大變だつたのね』

『えゝ誠にどうも』

二人は顏を見合はすと涙ぐんだ眼を、殆んど同時に地の上に落しました。

『寮の皆樣は？』

『先生方と御一緒に駿河臺の武田さんへお立退きになりました』

『あらさう！』

武田と云ふのは同窓會の會長で、この學校第一回の卒業生の家なのです。ます子はその番地も邸もよく知つて居りました。

御堂も校堂も寮舍も何も、七棟の建物が一つ殘らず跡形も無く燃えて了つて、處々に柱だけが聳り立つたり、横倒しに倒れた建物の窓から火を噴いて居たり、何とも云へぬ凄さ。情なさに、ます子は又しても涙の眼を拭ひ〳〵するのでした。

築地も枯れて、目も當てられぬ光景です。音樂館の跡と思ふあたりに、針金ばかり殘つたピアノが七臺まで見えました。

『あゝあもう――』

ます子は見るに忍びなくなりました。込み上げる悲

しさをじつと抑へて、涙の顔を綺麗に拭きました。これから引つ返して駿河臺の立退所を見舞ふつもりで、門を出かゝりますと、丁度其處へ佛蘭西大使館からの見舞客が見えました。

『セ、ルグレッタブル（悲しうございますのね）』

ます子を此校の生徒だと見て取つた年若い貴婦人は、その美しい顔を曇らせて、斯う同情の言葉をかけました。

『セ、ヴレー、マダム（全くですわ）』

はにかみやのます子は耳元まで紅くなりましたが、返事はにつこり答へて、輕く會釋したまゝ別れるのでありました。

玉川砂利の道

火事場からは可成り離れたところでも、商店と云ふ商店は、皆な大戸をおろして、店を閉めて居りました。ます子は何か見舞に持つて行く品を買ひ度いと思ふのでしたが、さうした有樣なので、家の近所から買つて來るのだつたと後悔しました。

でも駿河臺間近へ來ると、平生の通り商店は商買をして居りました。洋菓子屋に寄つてビスケットを買つて、それを風呂敷に包んで抱へたます子は、鈴木町の物靜かな通りに差しかゝると、一軒々々表札に氣をつけて歩きました。

武田と記した電燈を見つけると、ます子の瞳は輝きましたが、立ち止まつて何故とも知らぬ動悸の靜まるのを待ちました。

門を入つて正面の玄關まで、眞直ぐに敷かれた玉川砂利の道は、可成りに長かつた。兩側の植込には、少女椿の淡紅の蕾が、江の島土產の貝細工のやうな、可憐なさまに匂ふのでした。

嚴しい、まるで華族樣のお邸のやうな氣取つた玄關先に立つと、ます子は改まつて案内を乞ふのが、何と無く極りが惡いやうな氣がして、暫くためらつて居りました。

と急に右手寄りの、建仁寺垣の處の木戸口が開きました。紫つぽい更紗縮緬の小袖の端が、ちらりと見えて飛ぶやうにして出て來たのは慶子です。

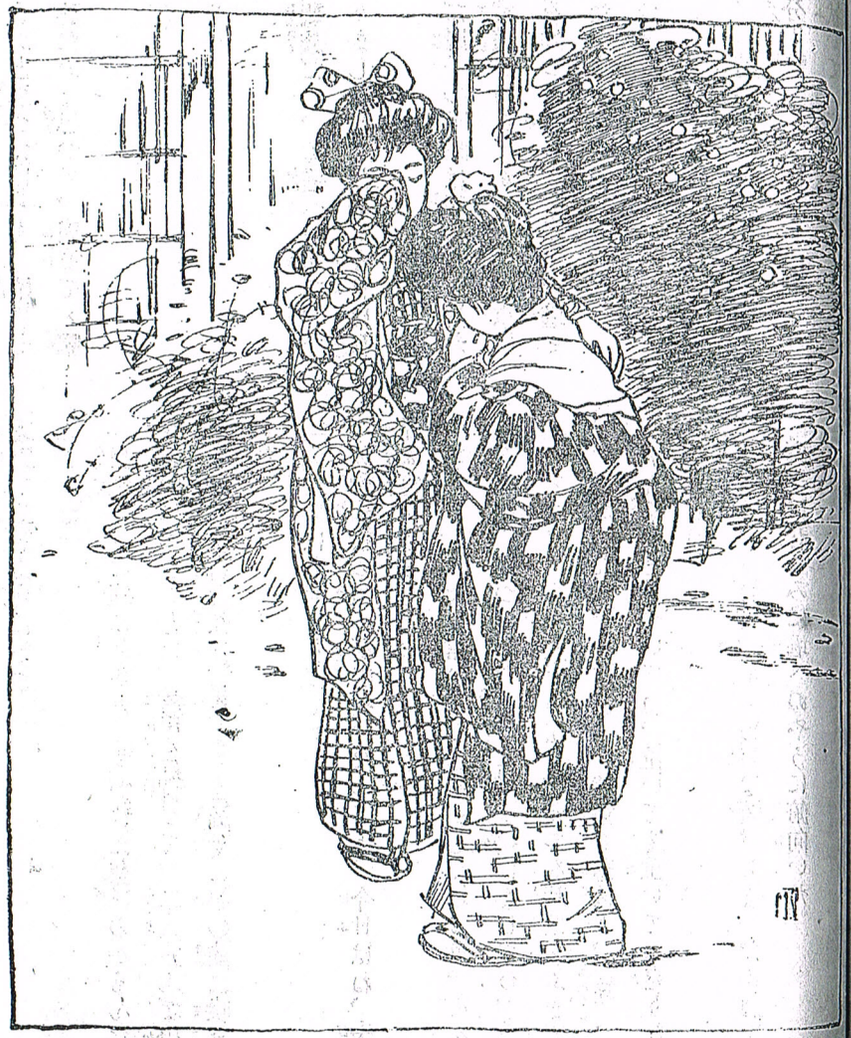
『あら？』

ます子も驅け寄つて、親しい二人は抱き合つて泣きました。

『ます子さん、逢ひ度かつたわ』

慶子が犇と取りすがると、ます子も寄りすがつて、又しても涙をはらはらと落すのでした。

『私ね、一人ぼつちで二階に居ましたのよ、そしたらね、あなたが御門を入つてらつしやるんでせ



私は大事な寫眞を燒きました

う、手を叩いて知らせやうかと思つたけども、嬉れしくつてね、一時も早く逢ひたいと思つて、周章てゝ驅け出して來ましたのよ』

『皆樣は？』

『被在らないわどなたも？』

『如何して？』

『皆樣はね、お宅だの御親族だの、お迎へが來て、今朝程早くにお出掛けになりましたわ、だから今日は私一人ぼつちよ』

淋しさうに唇を嚙んだ慶子の眼瞼は赧らんで見えました。遠い北海道に伯父樣があるばかりで、東京に身寄もない悲しい身の上を知つて居るます子は、堪まらなく氣の毒になりました。

『慶子さん勘忍ねえ、もつと早く來る筈だつたのに、學校へ寄つたもんだから……それに私、今朝になつてやつと知つたのよ。一時半から燒けてたんだつてね、恐かつたでせう隨分！』

『え』慶子はそつと涙を拭いて『庭を歩きませうか、此處で立話も變だわね』

『さうね』

奥深さうな庭に入ると、すがれた葡萄のからんだ亭屋が眼につきました。腰掛を拂つて、二人並んで掛けますと、猫柳の銀芽が花よりも綺麗に眼の前に咲きました。

『先生方は如何なすつて？』

『先刻學校の方へ御出掛になつてよ、今日はね、大分見舞客があるんだつてね』

『さう、私大使館の方に逢ひましたわ、セ、ルグレッタブル、だつてね、私に聲を掛けましたわ、セ、ルグレッタブル、慶子さん、燃えてる時は云ふまでもない恐かつたでせうけども、燒跡も悲慘よ、私、もう〳〵胸がどきついてね、泣いても泣いても足りないんですもの』

『さうでせうねえ、あゝあ皆な燒けちまつたのね』

慶子は悲しみに堪へぬやうに俯向いた。

『着更位お持ちになつて？』

『いゝえ――』と力をこめて打ち消しましたが、亂れた髪をかき上げて、『着のみ着のまゝ、皆樣皆な晴衣と着かへたのがまだしもよ』

『まあ！』

ます子は今更のやうに、紫紺地に五枚笹模樣の、慶子の着物に眼をつけました。

『私が大好きだと云ひ〳〵した羽二重の袷も燒けたのね』

『えゝえ、それ處か、ます子さん、泣いて頂戴、私はね、大事な〳〵寫眞を燒きました！』

『えッ』

ます子は飛び上がつて驚いたが、

『御兩親のお形見をなくなすつたのね、慶子さん、お察しゝてよ、まあね、どんなにか、どんなにかお悲しいでせう』

やさしく云はれて、慶子の涙は止めどもなく流れた。

『でもねえ、位牌だけは初めに腰へ結つたもんですから、燒かないで持ち出しましたの』

暫らくの後、慶子は思ひ返したやうに、淋しい笑顔を見せました。

『慶子さん？』

慰める筈のます子が今度は泣かされて、不仕合せな友の膝に打伏したまゝ久しく久しく顔もあげ得ませんでした。（をはり）

＊　＊　＊　＊　＊

『オルレアン』の少女（口繪解說）

オルレアンの少女と云へば卽ちジヤンダルクの事でありますジヤンダルクが十五世紀の頃佛蘭西の國難に當つて蹶然百姓屋の娘から身を起して士氣を鼓舞し遂に英軍をしてオルレアンの圍を解くの餘儀なきに至らしめたのは皆樣も知つて居りませう。此の女丈夫は千八百九十四年に至つて聖徒として祀らるゝことになりましたが羅馬法王は夫に容易に許可を與へず、紛紜の中に今日に及んだのですがやうやく昨年の十二月に至つて、法王廳も遂に許可を與へました多分今年の基督復活祭には盛大なる聖徒に列するの式を擧げる事でありませう。繪は彼女がコンピエーンの附近で敵に捕はるゝ所であります。